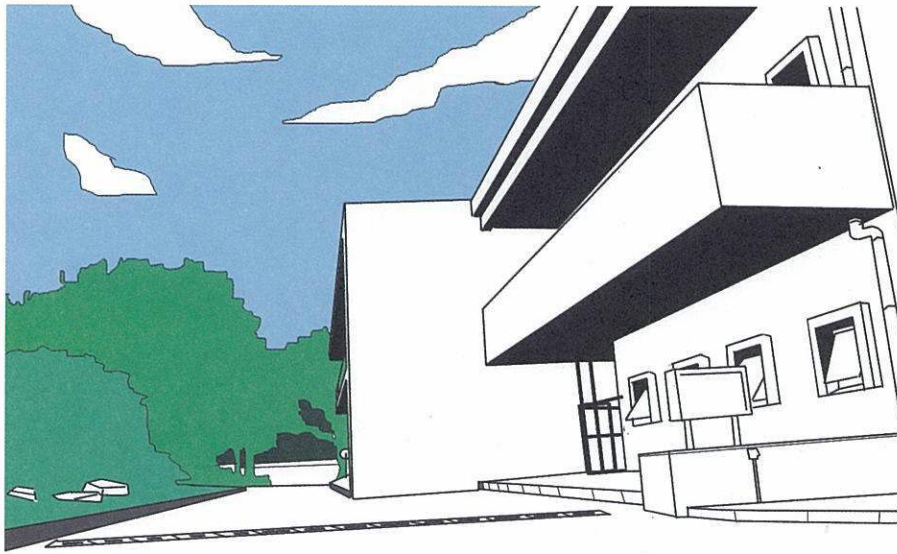


図書館だより

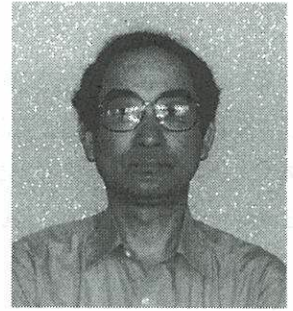
No.68 July, 2006



目 次

巻頭エッセイ	「本」に出会いに行く	一般科目・文科 平元道雄	1
読書のすすめ	高校と大学教養部時代の読書	電気電子工学科 長田芳裕	2
	異国の文化から学ぶ	生物応用化学科 石井 努	3
	読書の意義について	一般科目・文科 金城博之	5
	「滞独日記」	一般科目・理科 谷 太郎	6
私の一冊		各学科学生 6名	7
リレー連載<古典への誘い>	Introduction to Ceramics (2nd Edition)	材料工学科 濱上寿一	9
平成17年度 図書館利用状況			11
Information			12
編集後記			12

Kurume National College of Technology library
久留米工業高等専門学校図書館



「本」に出会いに行く

一般科目・文科 平元 道雄

「本」のことといえば、必ず思い起す言葉がある。

「本との出会いは、恋人と同じだよ！」

読書家で知られた、その先輩の下宿に行くのと、壁面いっばいに天井まで伸びた木製の本棚にぎっしりと書物が詰め込まれていて、独特の威圧感を与えていた。学者になるには3000冊読破が必要条件だ、が口癖だったが、ある時、いつもに似ず、^{くだん}件の言葉をふと漏らしたのであった。今は昔の学生時代の^{ひとこま}一齣である。

先輩はたくさんの「恋人」を紹介してくれ、その中の幾人かは私の恋人になりかけたが、「出会い」のときめきはなかったように思う。人間の恋人がそうであるように、自分の恋人は^{めいめい}銘々がそれぞれのやり方で出会うしかないというのが、本についても言えるのではあるまいか。

もう十数年も前のこと、自宅の近くにおもしろい古本屋が店を開いた。開店セールの際らしいに釣られて出かけてみて驚いた。何とハードカバーの本が100円均一で何冊も並んでいる。貧乏書生には何がなんだか分からない。店長に向かって叫んだものだ。「なんでこんなに安くできるの!」。新古書店の登場である。以来、学校の帰りにそこをのぞくのが日課となった。

古本屋との付き合いは長く、そこで出会った忘れ難い恋人も多いが、古本屋の魅力は、そのえも言われぬ雰囲気があると私は思う。一言でいえば知的雰囲気だ。本好きが事情があって手放さなければならなかった本たちが、新たな主人との出会いを待って佇んでいるという風情である。読書家の手を経ているだけに当たり外れがない。問題はこちらの懐具合だけである。もちろん100円均一も悪くはない。私は度々、授業の中で新古書店の話をする。文学全集や古典全集が小遣い程度で簡単に手に入るからだ。読書に目覚めると座右に備えたいという願いが強くなる。高価な新刊が駄目

なら古本でとなるが、昔は高嶺の花の古書が多かった。さように古本とは値打ちのある古書のことと見ていたら、新古書店は、そのイメージを一新してしまった。見てくれが一番で、年代もののハードカバーはむしろ安いのだ。^{てもとふじよい}手許不如意の本好きには有難いことこの上ないが、漫画本よりもハードカバーが安いという世界に慣れてしまうと本の「価値」についての感覚が麻痺するのでないかと一方で要らぬ心配もしてしまう。とはいえ、読書に目覚めた学生諸君にとっては、座右に置きたい本を超廉価で家蔵できる幸運をもたらしてくれるのも紛れのない事実である。

世の中には、人の手垢がついた古本は嫌だという妙な潔癖症もいるが、「図書館」は究極の古本屋ではあるまいかと思う。上京の機会があれば、時間の許す限り私は国立国会図書館や神田の古本屋街を訪ねることにしているが、学校帰りの高校生が国会図書館を気軽に利用している風景をしばしば見かけた。公立図書館や学校図書館の整備が不十分な地方では、日常生活の中で図書館を利用する文化的条件が確立していないとも言われるが、パソコンの普及で図書館のネットワーク化が進み、以前よりも断然利用しやすくなってきており、もはや東京を^{うらや}羨むまでもない。

一書の人を畏れよ、という格言がある。書物が少なかった頃の西洋の言葉だが、年間七万冊が出版される今の日本でも^{しんげん}箴言としての価値に変わりはない。いろんな本を読んできて思うのは、何度も繰り返して読むにたえる本に出会えたか、という一事である。自己形成の書物としての「一書」との出会い、これこそいつの世にもかわらぬ青年期の読書の本質であろう。

とはいえ、玉石混淆の中からどんな本を選ぶか、これは大変なことだ。だからこそ^{あらかじ}予め慎重に選ばれた本

が置いてある図書館に足を運ぶ意義は大きい。もとより読書はこちらにその意志がなければ何も始まらない主体的な行為である。本と出会うためには、本の世界に自ら出向くことが必要だ。長いこの夏休み、人との出会い

を求めて、旅に出たりアルバイトに精を出すのもよいけれども、人生の伴侶ともなるべき「本」に出会うために、まずは本校の図書館を覗いてみてはいかがだろうか。

特集 読書のすすめ

高校と大学教養部時代の読書



電気電子工学科 長田 芳裕

読書の目的、読む本、読み方は、人の成長とともに変わるものです。学生の皆さんの参考になればと思い、高専本科の学齢に対応する高校と大学教養部（1、2年）のときの私の読書について書きます。35年以上も前のことで、携帯電話、パソコン、ゲームなどはなく、読書は娯楽の大きな部分を占めていました。

高校1、2年のときは、日本文学と外国文学（翻訳）から小説を中心に広く浅く読みました。これらの小説は、時空を超えて想像の世界へ私をいざなってくれました。しかし、今思い出してみると、物語のおもしろさや描写された情景の物珍しさに魅かれていた面が強く、小説の主題は真正面から受け止めるには重過ぎたようです。

高校2年の末頃に、テレビドラマで夏目漱石の「坊っちゃん」を見て非常におもしろかったので、家にあった「夏目漱石全集」からそれを引っ張り出して夢中になって読みました。読んだ後、何とも言えない爽快感が残りました。「大学へ行ったら全集の残りを読もう。」と心に決め、高校3年のときは受験勉強を優先させて、読書は封印しました。

晴れて大学生となって封印を解いて、読書を再開しました。当時、大学1、2年は教養部に所属し専門の学部からは隔絶されていて、専門にこだわらず自分の興味のおもむくまま好きなことを学びました。そして、何よりも時間的な余裕がありました。いわば公認のモラトリアムの期間で、受験勉強で疲れた心身を癒し、将来に備えることのできる貴重な2年間でした。

さて、教養部時代には、「夏目漱石全集」を手始めに種々の本を読みました。その中で、次に挙げる漱石の三作が印象に残っています。

最初は、「三四郎」です。これは青春の書で、あのとき読んでおいてよかったと思います。ストレイシープ (stray sheep) という言葉に象徴される青春のとまどいと心の揺れに大いに共感しました。その後、東京の大学に進学した高校の友人を訪ねたとき、大学の構内にある三四郎池に案内してもらい、小説と現実が渾然一体となった不思議な別世界を体感しました。

次は、「草枕」です。冒頭に有名な一節が出てきます。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」学生時代にこの意味は観念的には理解できましたが、社会に出てから実感しました。この本からは、気持ちに余裕をもって思索することを学びました。

最後に、「こころ」です。漱石はこの本の広告文に「自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む。」と書きました。この本を読みながら、私は人間の心のあり方について深く考えることができました。ただし、潔癖で物事を突き詰めて考える人は、もう少し年月が経ってから読むほうがよいでしょう。

一般に、読書の仕方には、広く浅く読むのと気に入った作家の作品を集中して読むという二通りがあります。私は学生時代に両方を経験しました。どちらを選ぶかは一長一短だと思いますが、まず前者の仕方での自分の

気に入った作品を見つけ、次にその作者の作品に取り組むのが自然の流れでしょう。後者を実行する場合には作者の選択が重要と思います。いくら自分の好みに合うからといって、世の中に受け入れられない作家の作品に耽溺することは物の見方や考え方への偏った影響が懸念されます。

今の世の中は、娯楽や情報が溢れかえっていて、皆さ

んは落ち着いて読書する時間を見つけにくいかもしれません。しかし、私自身振り返ってみると、学生時代の読書はその後現在に至るまで、物の見方や考え方に陰に陽に、良くも悪くも影響しているように感じます。この文を書きながら、人格の形成期である学生時代に書に親しんでいてよかった、とつくづく思います。

特集 読書のすすめ

異国の文化から学ぶ



生物応用化学科 石井 努

筆者は、2000年6月から約2年間、オランダ国の西側に位置する Enschede という都市に滞在していた。ドイツとの国境に位置するこの都市には、1960年代にオランダ12番目の国立大学 Twente 大学が設立され、筆者はそこに博士研究員として所属していた。ちなみにこの Twente 大学は現在オランダ最高峰の大学に成長している。オランダ滞在中には、化学の研究に没頭していたわけであるが、言葉と文化や習慣がまったく異なる異国の生活では、いくつも貴重な体験ができた。ここでは、筆者が感じたオランダの文化・習慣を学生諸君に紹介し、異国の文化からはいくつもの学ぶべきものがあることを伝えたい。

オランダ人を一言で表すなら、「気まぐれ」が適切ではないだろうか？オランダの天気はいつも気まぐれで、数分前までの晴天が突然豹変し豪雨に変わる。それが数分後には快晴に戻る。こんな天候がオランダでは日常的である。オランダ人の性格は、オランダの天候と同じでとても気まぐれである。長続きしない性格、自分の興味のあるものにはすぐ没頭するが、ある瞬間に集中力が無くなる。集団の中ではとにかく個性を全面に押し出す。これらのオランダ人の性格は、現在開催されているサッカーの世界カップで、顕著に反映されている。個々のサッカーの選手は超一流で、サッカーが1対1の球技ならオランダが優勝できると言われことが多い。しかし、

いつも優勝候補と期待されながら、途中で力尽きてしまう。原因はいつもチームが一つにまとまらない、空中分解である。本原稿の執筆は6月24日に行ったが、その日はオランダがポルトガルに1-2で負けた日である。

さて、話を本題に戻そう。オランダ人は「気まぐれ」であるが、それは反面「自分で考えて行動する」ことを示している。つまり自立した精神の持ち主である（ここで聞いたフレーズである！）。この自立の精神は、小学校の教育システムで育まれているようだ。戦後オランダの教育では、「子ども自身に考えさせること」に重点をおいた政策がとられた。例えば、授業中に児童が解答を間違えた時、先生は「それは間違い、答えはこちらです」とは絶対に言わない。「そんな考え方もあるね。それ以外にこんな考え方はどうかな？」と、児童の間違いを前面から否定せず、間違った解答であるがそれを導きだした過程を大事にする。長所を伸ばして、自分で行動させる癖をつけさせているようである。この自立の精神を養うことは、非常に良いことであるが、時には誤った解釈の中で成長し、自分勝手な人間に成長するオランダ人もいる。それが上記に述べた気まぐれオランダ人の性格として現れているようだ。それにしても、オランダ人の自分で考えて行動する姿勢を、日本人は見習うべきである。筆者が所属していた

オランダの研究室の大学院生は、自分自身で研究を展開し、学士を取得していた。日本の大学院生よりも高いレベルの自立した精神を有しているのは明らかである。

オランダの文化でもう一つ見習う点は、家庭を大切にすることである。これはオランダだけに留まらず、ヨーロッパ全体に言えることである。朝は早くから仕事をし、夕方5-6時にはきっちり帰宅するが、その間は昼食と午前・午後のティータイム以外は仕事に没頭している。帰宅後は家族との時間を大切にしている。これは自分自身の心身の休養にもつながっている。仕事が充実している者は家庭も充実し、その反対も然りである。筆者が所属していた研究室の教授は、ある国際会議での招待講演が奥さんの誕生日と重なった時、寸分の迷いもなくキャンセルした、との逸話もある。日本人からすると、毎日夕方5-6時に帰宅したり、奥さんの誕生日の理由で休暇をとれば、間違いなくリストラの対象になる。オランダでは分業制が確立され、例えば大学では、教授・助教授は教育と研究以外の雑務に従事することは全くない。教授・助教授に対しほとんど同数のスタッフが雑務を担当している。ヨーロッパ特有の狩猟民族の文化である。農耕民族の長い歴史を持つ日本では難しい話であるが、今後日本が変わることを期待したい。

高専に着任してまだ数ヶ月であるが、海外に留学する学生の数が多いのには驚いた。若いうちに異国で生活することは確かに貴重な経験になる。もしこれらの留学経験のある学生諸氏が社会人となって、再び海外で生活する機会があれば、社会人として別の角度から異国の文化に触れてみては如何ですか。きっと留学時代には気づかなかった、楽しい面とそして厳しい現実を体験できると思います。

最後に、オランダの文化や習慣についてもっと触れたい方は、実際に現地を訪れることを勧めるが、下記の本に目を通されるのも如何ですか！

物語オランダ人・倉部誠・文藝春秋

ヨーロッパカルチャーガイド・オランダ「何でもありの王国へようこそ」・トラベラーズジャーナル



留学先の研究室メンバーと。

読書の意義について



一般科目・文科 金城 博之

昨年十月に沖縄から赴任し、久留米高専で教鞭を執り始めて早十ヶ月、学内のシステムや学生気質も徐々に掴みかけてはきたものの、理系学生に語学をいかに教えるか、高専生の必要とする英語はどのようなものであるか、自分なりに様々な工夫を試みる毎日です。

中学卒業直後の初々しさの残る1学年から5学年、更にその上の専攻科までが共に同じキャンパスで学ぶ高専は、一貫した専門教育のみならず、学級や部活を通して級友や先輩、そして教官といった様々な人間関係から学ぶことが多くあります。人は人から多くを学ぶものであり、特に多感な時代に他者から受けた刺激は将来の活力ともなり得る大変貴重なものと言えるでしょう。本を読むこともまた、この大切な時期をさらに豊かなものにしてくれます。

高校時代、取り立てて優秀でも熱心な生徒でもなかった私は、今では大変反省していますが、国語の授業をあまり真剣に受けていませんでした。教科書の指示代名詞からその指す名詞に矢印を引いたり、作者の言いたいこと（と先生が解説する）箇所には波線を引いたり、ただ何となく授業を受けていました。しかし、ある国語の先生の言葉をよく覚えています。

「理解できない思ったところには必ず赤線を引きなさい。成長するに従って必ず分かる日が来る。人生も同じで、理解できない箇所は赤線を引いて、決して忘れないことだ。私たちは限られた存在だから時を止めて考え続けることは出来ない。生きていく中で多くの困難に出会うだろうが、理解できなかった事柄を忘れてはいけない。心の中で赤線を引きなさい。」

経験のみが教えてくれることも多くある。理解できないことを怖がってはいけない。未知の事柄に触れたとき、怠け者は知識に対して不誠実な態度をとる、分からない

まま忘れてしまおうとする。決して忘れないことが大切なのだ。未知の事柄に対する真摯な態度こそが大切なのだと教えられました。

教科書に載っていた詩人・高村光太郎の「火星が出ている」という詩は、高校生の私には理解しがたい詩でした。しかし、気にかかっていた高村光太郎の詩集を私は米国留学の際に持っていく唯一の日本語の本に選んだのでした。海外生活の孤独感、学業に対しての様々な不安等何度も挫折しかけた留学中に再度読み返してみると不思議と理解でき、感動した記憶があります。皆さんも使った国語の教科書は是非残しておきましょう。いつか読み返したとき、その時の自分の姿が蘇ると共に、青春時代に何を考え、どう理解し、何を読み取ったかが分かるはずで、そして同時に、より経験を重ね成長した自分を省みる機会となるものです。

初めて挑戦した洋書・J. D. サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」は何度も読み返し、主人公に同化してしまいそうになる程ひどく共感したのが、わずか二年後に読み返した時には主人公の未熟さが目に付き、さりとして他人とも突き放せず、主人公を成長過程にある弟のように思えました。この作品の主人公に共感するには読み手が成長過程である必要があったのだと思います。その本に対して、未熟な内に理解できた経験を持つ読み手と、成長してから読んだ読み手とでは作品に対する愛着が異なるということは、「ライ麦～」を大学の卒論に選び、数本の批評を読んだ私の感想です。

読書は作者との対話であると同時に、自分との対話の機会をも与えてくれます。その自分とは今現在の自分だけでなく過去の自分そして未来の自分との対話だと思えます。本を選ぶのに資格など要りません。大切なのは第一歩を踏み出すこと、まずはどの本でも手に

取ってみることで。理解できないことにも意味があり、読みながら考えたことはそれが成長の記録となると思います。皆さんが心に残る本に出会うことを願いつつ、最後に私が高校・大学時代に読んだ中からお勧めの本を紹介して締めくくりたいと思います。

特集 読書のすすめ

「滞独日記」



一般科目・理科 谷 太郎

『このごろは実に何にも勉強しない。これではいかんと思いつつ／たいくつで仕方がない／せに勉強する気がしない／講義のときはねむくていけない／あと一月半、毎日教室通いかと思うとゆううつになってくる／雨ふり。学校はさぼってパスカルをよむ。物理よりも面白くて仕方がない。十一時ごろまでよむとねむくなる（夜ではない朝のはなし）。そこで十二時までひるねをする／なまけたことに気がとがめて、心細くなる／わからないので泣きたくなる／どうして自分はこうも頭が悪いのだろう…』

これらの言葉がノーベル賞受賞者のものと聞くと、読者は驚かれるのではないだろうか。本稿では、日本人二人目のノーベル賞受賞者で理論物理学者の朝永振一郎（1906-1979）が、若き日の苦悩と葛藤を綴った日記、「滞独日記」を紹介したい。

この日記は、朝永がドイツ（独逸）に留学中、1938年4月～1939年5月にかけて書かれた。このごろ朝永は30台前半、「量子論」という最先端の学問を身につけ、国内では既に一線の学者であった。若手のホープとして当時の学問の中心地ドイツに乗り込み、後にノーベル賞を受賞するほどの学者でも、これほどまでに自信を失くし、無気力に蝕まれることがあるのだ、という事実、読者は驚きと同時に、同じ人間としての近しさを感じないだろうか。この本に出会ったとき、筆者は博士課程の学生であったが、朝永と専門が同じという親近感

井上靖「敦煌」「天平の蠶」、坂口安吾「墮落論」、パール・バック「大地」、ドストエフスキー「罪と罰」、マーク・トゥエイン「ハックルベリフィンの冒険」、「アーサー王宮廷のコネチカットヤンキー」、島崎藤村「破戒」、司馬遼太郎「竜馬が行く」「燃えよ！剣」

も手伝って、まるで友人同士、胸の内を打ち明けあっているように思えた。朝永が一字一句引き写し、『これをよんでなみだがでたのである』と書く、恩師からの励ましの手紙の文面に、筆者自身も涙がでた。それにしてもなぜ、朝永はこのような状態に陥ってしまったのか。

このごろ朝永は学問上の転換期にあったようだ。日記には、自分のそれまでの成果に満足できず、『じりじりとした野望』を抱いて、ぎりぎりの努力を続ける姿が記されている。『計算にかかるがうまくいかない。苦しい。』『夜までやると、つかれて、精神がおかしくなる。うまくいかないからだ。』『ぬかよろこびかもしれぬと思うとおびえた気もちになる。』『やはりだめだ。』『また少しすむように思える。』『また行き詰った。もうどうしていいか判らない…』結局、この日記が書かれた間、朝永は何一つ産み出せない。価値を認めて追い求めたものを、全力を尽くしても得られないとわかったとき、精神は自己を守るために戦う。冒頭の言葉は、その張り詰めた精神の格闘がもたらしたものである。

朝永の自意識が堂々巡りをはじめるときには、湯川秀樹の存在がある。二人は高校時代から互いの才能を認め合った同級生で、同じ学問分野でのしぎを削るライバル同士だった。ただ、この日記が書かれた数年前に、湯川が、後に日本人初のノーベル賞を受賞することになる傑出した仕事（中間子論）を成し遂げ、

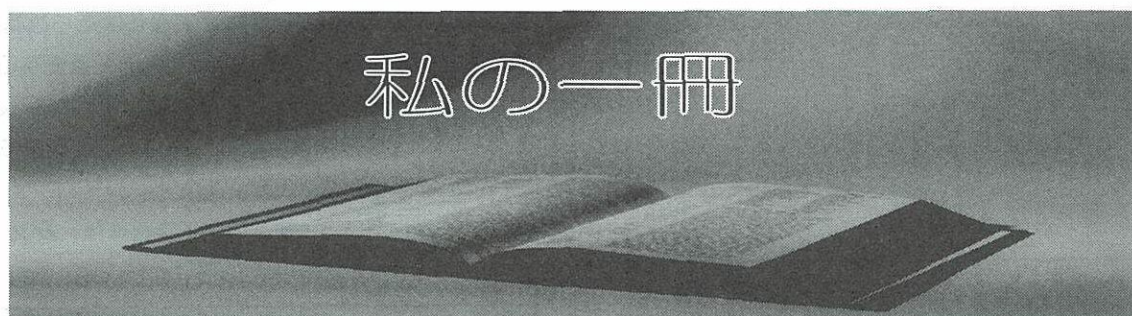
朝永は『自分ひとりがとりのこされ』だと感じる。'38年8月20日の日記は痛切である。『湯川から手紙がくる。彼、はり切って研究している。ぼく愈けて、計算の誤りをしている。たまらない自己けん悪を味わう…何をしていいか判らない』しかし自分の無能を嘆きつつも、それを認めることは自尊心が許さない。一転して、追い求めていたものの価値を貶めることになる。『学問だとか道徳とかいう崇高なものに…そんなもの何だと言いたい気もちがする。』だが、それも本心でないことはわかっている。『そんなものほんとに何だと思っているなら、こんなことを日記に書かなくてもいいのである。』やがてこの堂々巡りに疲れて、無気力が押し寄せてくる。『ひるから散歩しようと、きものをきかえたが、そのままいやになって、またきものをぬぐ。』

おそらく朝永は、自身の負の感情をぶちまけることによって、危うい綱渡りを続けるための、ほんのわずかな浮力を得ていたのであろう。注意深く日記を読めば、自

己卑下と無力感をこれでもかと書き連ねているときにも、朝永は決して研究の歩みを完全には止めていないことがわかる。氣力を振り絞って、ライバル湯川の間電子論に正面から向き合い、そして'38年12月14日を迎える。『計算すすめたら積分が発散した、おかしい。こういう種類の発散は今まで一度も出てきていない。』苦闘のさなかに踏み出したこの小さな一歩こそが、九年の歳月を経て「くりこみ理論」として結実し、後のノーベル賞に繋がるその最初の一歩となったのである。

※「滞独日記」はその全部が「朝永振一郎著作集 別巻2(日記・書簡)」(みすず書房)に、一部が「量子力学と私」(岩波文庫)にある。

※興味を持たれた読者には、湯川の自伝もおすすめである〔「旅人」湯川秀樹(角川ソフィア文庫)〕。力学演習の授業で初めて朝永と出会ったとき、『朝永君は、私がそれまで知っていたどの友人よりも、頭が良いことが私には直ちにわかった』そうである。



山田 悠介著

～パズル～

角川書店

武装集団に教師を人質にとられた。助けるためには48時間以内に隠された2000ピースものパズルを全て探し出し、完成しなければならない。リタイアすることも可。普段、会話をかわすことのない超エリートクラスが選ばれた。人として助けなければと正義感の強い生徒は立ち上がるが、大半の生徒は自分のことしか考えない。自分がもし、このクラスの生徒だったら？やはり自分の身を案じ、リタイアしてしまうのではないか……。

人とのつながりや、人を思いやり助け合うことについて改めて考えさせられた。

(材料工学科4年 下釜 江美子)

森 絵都著

Colorful

理論社

1度死んだはずの魂が天上界での抽選に当たり、いきなり他人の体を借りて下界で過ごす事になるという非現実的な物語です。気がつく小林真になっていた僕は、他人事のような気持ちで生活していくのですが、その中で少しずつ大事なことに気付いていきます。見方や気持ちを変えて生活する事の大切さや、自分自身と向き合うことの難しさが、現実離れた設定だからこそ、よりリアルに表現されていて、とても心動かされる一冊です。また、何度読んでも違ったおもしろさが見つけられ、文字通り多彩な魅力のある本だと思います。

(生物応用化学科4年 手嶋 三奈美)

茅田 砂胡著

デルフィニア戦記

中央公論新社

国を追い出された王様と、迷い込んできた異世界の少女の物語がたくさん仲間たちと共に、いきいきと描かれています。時にシリアス、時にコメディータッチで書かれており、とても楽しく読み進めることができます。全 18 巻と、少々長いですがぜひ読んでみては。きっとハマります。

死と隣り合わせで生きる人々の命の輝きは、素晴らしいものだと思います。「大事なのはいつ死ぬかじゃない。死ぬまでどう生きるかだ」という主人公の言葉は、とても心に残るものでした。

この本は、僕の人生を変えました。この本以降、部屋に本が増え続け、人間の居場所が無くなってきました。少々問題です。それはともかく、この本から、読書の楽しさを学ぶことができました。これから先もけして手離すことのない、人生の一冊となると思います。

(機械工学科4年 河野 邦俊)

アレックス・シアラー著 金原 端人訳

青空のむこう

求龍堂

「僕が死んだら、きっと後悔するんだから。」「後悔なんてするわけじゃないじゃない。大喜びだわ。」ハリーは姉のエギーと大げんかをして家を飛び出し、交通事故で本当に死んでしまう。ハリーはその最後の一言を姉に謝るために、自分の死んだ後の世界に降りて行く。そこでハリーは、生きている間は気づかなかったかけがえのないもの、生きていたからできたこと、たくさんのやり残したことに気づく。対人関係や家庭、進路など悩みの絶えない時期だが、そんなとき、ふと、何気ない毎日でもかけがえのないものに囲まれ、支えられて生きていると気づかされた。

(専攻科 物質工学専攻1年 秋吉 茂年)

藤原 てい著

流れる星は生きている

中公文庫

この作品は、日本人家族 5 人の満州からの壮絶な脱出を描いたノンフィクションです。家族構成は若い夫婦に小さな子供が 3 人。このうち、父親は北部で過酷な労働を強いられることとなります。残された母親は、3 人の子供を連れて国境を目指します。しかし、貧困・伝染病・疎開団内の分裂などの様々なトラブルに巻き込まれ、容易に先に進むことができません。行程のなかでも、山を越えて徒歩で三十八度線を目指す場面の描写は凄絶をきわめます。何せ力尽きて死ぬ人や、子供をうしなって発狂する人まででてくるのですから。この母子、そして父が迎える結末は是非実際に読んで確かめて欲しいのですが、僕はこの作品を読んで、非常事態における方法とは、道徳とは何か?ということについて考えさせられました。

自らの生存が危ぶまれる状況では、必然的に人は利己主義となり、道徳は失われます。そのような中で放たれる「魂の声に」、平和な時代を生きる僕たちは耳を傾ける必要があると思うのです。なお、本作に登場する「父親」とは作家の新田次郎氏のことであり、また、3 人の子供のうちの 1 人は数学者ながらエッセイなどを数多く出版されている藤原正彦氏です。

(制御情報工学科4年 安武 翔太)

ヴァレンタイン・ディヴィス著 片岡 しのぶ訳

34 丁目の奇跡

あすなろ書房

このお話は老人ホームを追い出された一人の老人がとあるきっかけで百貨店のおもちゃ売場でサンタクロースの格好をして働く事になり、だんだん彼のまわりの人々を幸せにしていくという心温まるお話です。彼は見た目も心の中もサンタクロースそのもので、そんな彼の影響で夢をみる事は馬鹿馬鹿しいと思っていた現実主義の親子でさえも夢や理想をもつようになっていくのです。サンタクロースが出てくるのでちょっと季節外れですが、読んでいるほうも幸せな気分になれるお話なのでとても気に入っています。

(電気電子工学科5年 松岡 綾)

リレー連載 —〈古典への誘い〉—

Introduction to Ceramics (2nd Edition)

By W.D. Kingery, H.K. Bowen, D.R. Uhlmann

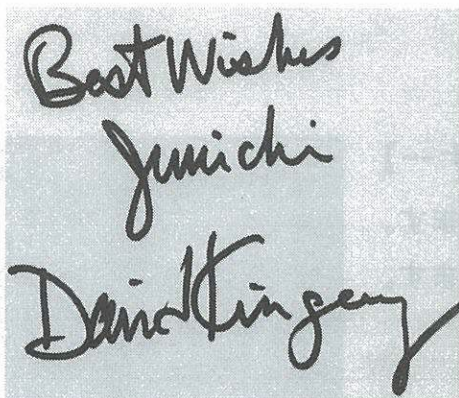


材料工学科 濱上 寿一

今回のリレー連載〈古典への誘い〉は材料工学科の濱上が担当させていただくこととなった。今年4月に赴任してきたばかりの著者がこのリレー連載を担当することになったのは単に材料工学科の図書委員になったからである。〈古典への誘い〉ということで、何をテーマにして書くべきか？また、読者は誰なのか（おそらく久留米高専の学生さん？）ということを考えて、私が大学の研究室に配属されて最初に輪講で勉強したセラミックス界のバイブルとして知られている「Introduction to Ceramics」（洋書）を紹介させていただくことにした。著者は、今から17年前に鹿児島工業高等専門学校電気工学科を卒業し、その後、長岡技術科学大学電気系電子機器工学科の3年次に編入学した。そして、学部4年で研究室に配属されるのだが、配属された研究室の指導教官は電気系に席を置きながら、実は「化学（正確にはセラミック材料科学）」のスペシャリストであった。結局、その研究室で大学院博士課程までの6年間を過ごすこととなった。その研究室で自分の研究テーマを遂行するためには、どうしてもセラミック材料科学の基礎的な知識を修得しなければならなかった。そんな中、研究室では先輩、後輩を交えた学生間で自主的に学ぶ勉強会（輪講）があった。その輪講で出会ったのが、ここで紹介する「Introduction to Ceramics」であった。

セラミックスといえば、古くは縄文時代の土器などの陶磁器から始まり、現代の食器、窓ガラス、衛生陶器（便器など）、タイル、コンクリートなど我々の生活になくてはならないものである。芸術品である陶磁器を創作するためには、職人さんの経験と勘によるところが大きいといえる。しかしながら、工業製品として実用する場合には、これまでの職人さんの経験則ではなく、セラミックスの分野に化学的、物理的な考え方を取り入れた一つの学問として体系化することが必要となってきた。このような学問体系が構築されたおかげで、現在、多くの機能性をもつセラミックスが工業製品として世の中で実用化されている。たとえば、携帯電話やパソコンなどの電化製品、自動車に搭載される各種センサ類や排気ガス浄化用触媒、情報化社会に必要な不可欠な光ファイバー、医療分野における人工骨などのあらゆる分野においてセラミックスは応用されている。

「Introduction to Ceramics」では、セラミックスの基礎と応用について詳細に説明されている。基礎としては、セラミックスの特性 (Characteristics of Ceramic Solid) やセラミックスにおける微細構造の発達 (Development of Microstructure in Ceramics)、応用としては、セラミックスの性質 (Properties of Ceramics) について詳しく述べられている。これらの基



博士からいただいたサイン



博士との記念写真

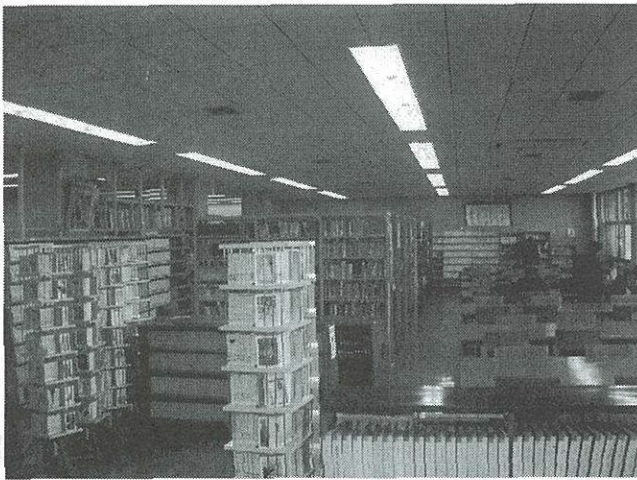
礎と応用を通して、現代のセラミック産業が成り立っているといっても過言ではない。

「Introduction to Ceramics」の著者の一人は W.D. Kingery 博士である。博士は「現代セラミックスの父」と称される偉大な研究者である。偶然にも私が大学院 1 年次に在籍していたとき、博士が長岡技術科学大学で講演される機会があった。当時、博士の講演（もちろん、英語）の内容は完全に理解することはできなかった。講演終了後に、個人で所有していた「Introduction to Ceramics」、正確には日本語に翻訳された「セラミックス材料科学入門 基礎編」の裏表紙に博士からサインを

いただき、記念写真を撮影させていただいた（前頁に写真掲載）。今となっては、学生時代のよい思い出である。後日談ではあるが、社会人（東京都立大学工学部工業化学科助手）となって自分で稼いだ給料で、洋書の「Introduction to Ceramics」を購入させていただいた。

「Introduction to Ceramics」（初版）は本校図書館に所蔵（図書番号 100093960）されていますので、興味があれば英語の勉強もかねて一読されてみてはいかがでしょうか。ちなみに、訳本である「セラミックス材料科学入門 基礎編・応用編」も図書館にあります。

図書館内写真



【閲覧室】

これからしばらくの間、仮教室として使うため、図書館のホールを使えません。こちらを利用して下さい。

但し、この部屋の中では、私語・飲食が 禁止 となっています。

【新刊図書のコーナー】

新刊図書を並べています。
当然、貸し出しもしています。

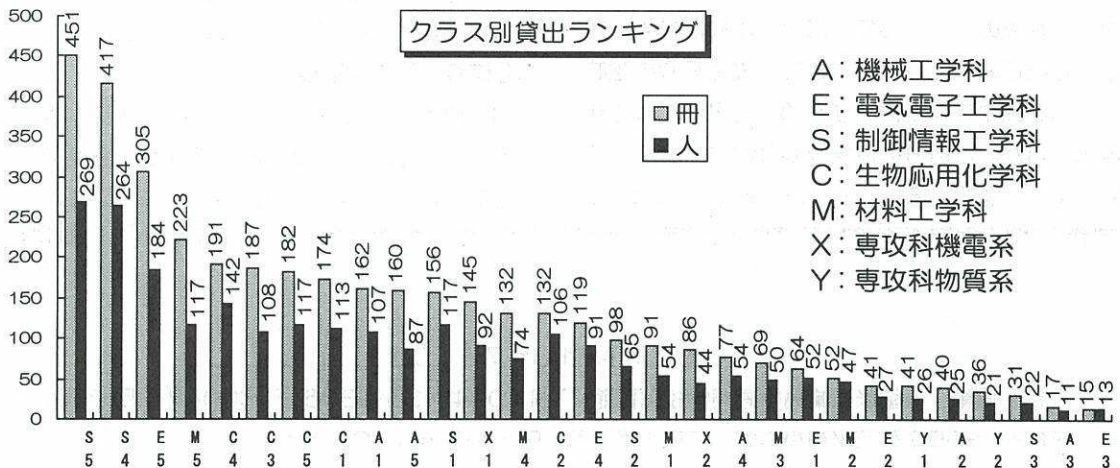
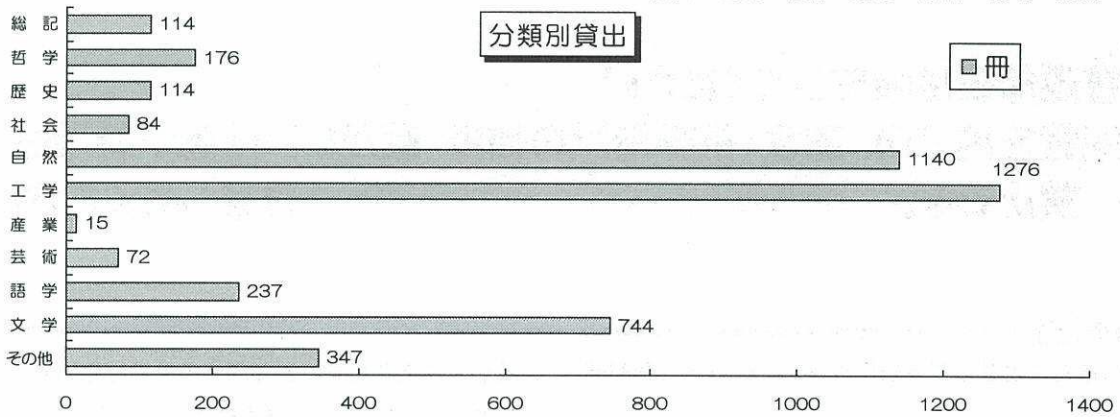
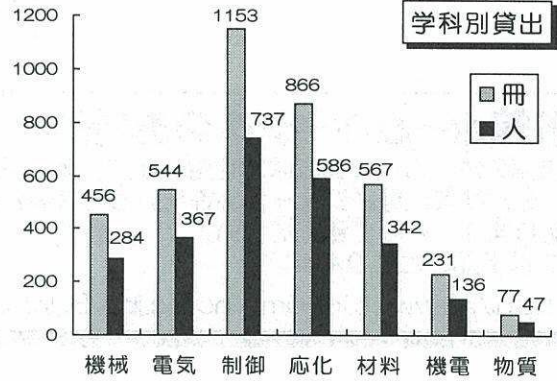
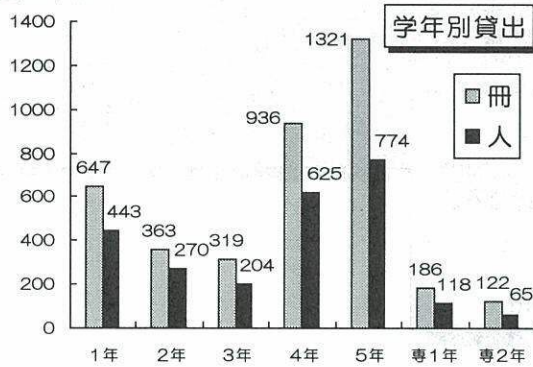


平成17年度図書館利用状況

◆開館日数及び入館者数

月	開館日数	入館者数			一般利用者数 (内数)	一日平均入館者数 (四捨五入)		
		平日		土曜日				合計
		時間内	時間外					
4	24	2,819	346	93	3,258	17	136	
5	23	3,367	692	128	4,187	28	182	
6	26	3,631	665	235	4,531	34	174	
7	23	2,635	267	79	2,981	24	130	
8	23	1,744	0	0	1,744	27	76	
9	23	4,153	666	257	5,076	40	221	
10	25	2,776	443	207	3,426	58	137	
11	24	3,009	640	210	3,859	21	161	
12	22	2,934	409	53	3,396	11	154	
1	21	3,413	718	151	4,282	23	204	
2	23	3,153	542	152	3,847	17	167	
3	24	1,168	104	39	1,311	23	55	
合計	281	34,802	5,492	1,604	41,898	323	150	

◆図書貸出状況



Information

下記のとおりお知らせいたします。開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。

夏季休業特別貸出

- ◆貸出期間：7月13日（木）から8月21日（月）まで
- ◆返却期日：8月28日（月） ◆貸出冊数：5冊以内
- ※一般利用者及び教職員は通常貸出です。
- ※返却日厳守の事

開館時間の変更

- 7月21日（金）から8月31日（木）まで
- ◆月曜日～金曜日 9時～17時
- ◆土・日曜日、祝日、及び
- 8月11日（金）～16日（水）は休館日です。
- 時間外開館は行いません。

図書館ホームページへのお誘い

図書館のホームページには、利用の仕方、新着案内、お知らせ、蔵書検索、電子ジャーナル等々いろいろな情報提供の窓口があります。一度ご覧ください。
URLは下記のとおりです。

<http://www.cc.kurume-nct.ac.jp/LB/library.html>

図書返却日は厳守してください。

閲覧室内での、飲食・携帯電話の使用・騒がしい行為や雑談は禁止です。…………… 注意してください。

《編集後記》

私が図書主幹となって3号目となる、第68号をお届けします。

この数年、教員の入替わりがあり、本校に多くの新任の先生方が着任されました。そこで、先生紹介の意味も含め、4名の先生に「読書のすすめ」を書いて頂きました。各先生方が、ご自分の体験談や図書の紹介などを書かれています。是非、読んで下さい。先生の、普段と

は違う一面を感じることができるのではないのでしょうか。

もうすぐ、夏休みが始まります。特別貸出もあり、普段よりも多くの本を借りることができます。この機会に本を借り、読書を楽しんでください。

図書館では、皆さんのためになる本や、皆さんが読んでみたいと思う本を充実させるよう、考えています。そろえて欲しい本があったら、要望として出して下さい。

（図書主幹 山崎 有司）

発行日：平成18年7月10日

発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館 Tel：0942-35-9306 Fax:0942-35-9307
〒830-8555 久留米市小森野1丁目1番1号 E-mail:L-staff.GAD@ON.Kurume-nct.ac.jp